

## 中国はなぜWTO加盟を急ぐのか

昨年7月に福岡県稲作経営者協議会(井田磯弘会長)の会員20名といっしょに中国黒龍江省三江平原のコメ産地を訪ねた。ここ1,2年,ミニマム・アクセス米のなかで主食用に輸入されているSBS(売買同時入札)米が12万トンに達し,その半分以上が中国東北産になったこと,それは輸入商社が米国での短粒種の契約栽培面積を減らし,品質の向上した中国の東北産短粒種にシフトしている結果であり,大連港から至近距離にある福岡県で売却されるSBS輸入米がかなりの量になるという情報もあったからである。良食味米の生産と精米加工技術をアップして日本への輸出マーケティングに乗り出している国有農場や生産農家の実態については,この6月に出版された『中国黒龍江省のコメ輸出戦略』(福岡県稲作経営者協議会編・村田武監修・家の光協会)で紹介した。

ところでこの本には,「中国のWTO加盟のもとで」という副題がつけられており,私は第5章で「中国のWTO加盟は何をもたらすか」を執筆した。東北産のジャポニカ米の輸出マーケティング戦略が,中国のWTO加盟を前提にしたものであることを強く感じたからである。

ここで問題にしたいのは,中国はなぜWTO加盟を急いでいるかである。

中国は最近の20年間,市場経済を導入する「改革・開放」によってめざましい経済成長を遂げ,GDP規模は世界第7位,貿易額世界第11位になった。農村では農産物の買上げ価格の引上げや,人民公社の廃止と農家請負制への移行,都市では国有企業の改革,経済特区への外資導入を突破口に对外开放が推進されてきた。

中国の貿易総額は,1999年には約3,600億ドル(世界貿易の3%),輸出(1,949億ドル)では世界第9位,輸入(1,657億ドル)では同じく第11位の大貿易国になった。90年代になると貿易収支は黒字となり,96年には外貨準備高が1,000億ドルを超え,日本に次いで世界第2位になった。輸出の主力品目は繊維品(衣料)など伝統的な労働集約型製品とならんで,機械・電気製品(自動データ処理設備や集積回路など高付加価値製品の伸びが大きい)など資本・技術集約型製品が重要度を高めてきた。すでに中国は一次産品輸出に頼る発展途上国とは言いがた

い。しかも、この輸出の増加を担ったのが加工貿易をリードする外資企業である。外資企業の輸出は、99年には886億ドルで輸出総額の4割余りを占めるまでになった。

貿易相手国についても中国は特徴をもつ。日本(662億ドル)を筆頭に香港(同438億ドル)、韓国、台湾などアジアが主な貿易相手国・地域であるのは当然であろう。注目されるのは米国が600億ドルを超える貿易相手国であって、とくに輸出相手国としては419億ドルでトップであり、輸出総額の21.5%を占め、中国にとっては最大の輸出市場になった。貿易収支においても225億ドルもの黒字を稼ぐ相手国になっている。今や中国は、わが国の貿易の対米依存(1998年で輸出総額の31%が米国向け)に遜色のないほど、米国市場に依存しているといつてよい。

中国経済の貿易依存度も著しく高くなっている。国内総生産額(GDP)に対する貿易額(輸出入合計)が貿易依存度であり、貿易が国民経済にどの程度の影響をもつかを表すが、99年には36.4%に上昇している。こうして「改革・開放」は、中国をして、対米輸出に依存した「日本型経済成長」に驚くばかりに似た経済構造に変貌させたようだ。

しかし、この間の華々しい経済成長は、さまざまな矛盾と格差を生みだしている。国有企業の大半は経営を悪化させ、地域間経済格差の拡大、さらに環境問題の深刻化などである。

中国政府は、国有企業改革や地域間経済格差など市場経済化の前進にとっての難題を解決するには、これまでの漸進的改革からの転換が不可避だとみたようである。WTO加盟によって市場経済化をさらに加速させ、高い経済成長率を確保することで矛盾を克服するという、言い換えれば、「改革・開放」が慎重に避けてきたロシア型「ショック療法」を採用して障害を強行突破しようとする試みであるといつてもよいかもしれない。

(九州大学大学院農学研究院教授 村田 武・むらたたくし)